



パック連通信

事務局：山梨県大月市御太刀 1-2-10

No.131 2024年10月10日発行
全国牛乳パックの
再利用を考える連絡会

TEL 0554-22-3611

牛乳パック再利用運動40年

前号(130号)に引き続き、牛乳パック再利用運動の発足当時の様子をお伝えしていきます。

牛乳パック再利用運動はさらに全国の市民運動の支持を得て拡大

牛乳パック再利用運動は、新聞・雑誌・テレビなどメディアに取り上げられ、その勢いはコラムにも掲載されました。

兵庫県立生活科学研究所の宮本豊子専門員のコラムには、冒頭部分「牛乳紙パック回収・再生運動。今年で3年目を迎え、全国にその旋風が吹きまわろうとしている。」と書かれています。運動の創始団体「たんぽぽ」の平井主宰や、牛乳パック回収活動に取り組む有機無農薬野菜の流通団体「ポラン広場関西」また日本最大規模の灘神戸生協へも牛乳パック回収の是非などを取材した上で、「牛乳パック回収、そりゃいいですねと安易にとびつける運動ではない。しかしこれを機に日本国中、すくなくとも牛乳パックを手にする人が、大切な資源だという意識を持てたら、と思う。メーカーも積極的にパックに表示するのもいいだろう。」「人工自然大国と呼ばれる日本。牛乳パック回収・改めて自然とモノの大切さを私たちに教えてくれようとしている。消費者パワーをいま一度、この運動に結集してみてもはどうだろうか。」と締めくくっています。

1986年(昭和61年)3月13日 木曜日 京月 日 発行 新聞



宮本 豊子

牛乳パック回収



再生紙に使われる牛乳紙パック

「いままさか、資源として再生される。と同時に手書き紙の教材にもなる。取組が盛んになる。牛乳パック回収、再生運動。今年で三年目を迎え、全国にその旋風が吹きまわろうとしている。運動の創始団体「たんぽぽ」の平井主宰や、牛乳パック回収活動に取り組む有機無農薬野菜の流通団体「ポラン広場関西」また日本最大規模の灘神戸生協へも牛乳パック回収の是非などを取材した上で、「牛乳パック回収、そりゃいいですねと安易にとびつける運動ではない。しかしこれを機に日本国中、すくなくとも牛乳パックを手にする人が、大切な資源だという意識を持てたら、と思う。メーカーも積極的にパックに表示するのもいいだろう。」「人工自然大国と呼ばれる日本。牛乳パック回収・改めて自然とモノの大切さを私たちに教えてくれようとしている。消費者パワーをいま一度、この運動に結集してみてもはどうだろうか。」と締めくくっています。

「いままさか、資源として再生される。と同時に手書き紙の教材にもなる。取組が盛んになる。牛乳パック回収、再生運動。今年で三年目を迎え、全国にその旋風が吹きまわろうとしている。運動の創始団体「たんぽぽ」の平井主宰や、牛乳パック回収活動に取り組む有機無農薬野菜の流通団体「ポラン広場関西」また日本最大規模の灘神戸生協へも牛乳パック回収の是非などを取材した上で、「牛乳パック回収、そりゃいいですねと安易にとびつける運動ではない。しかしこれを機に日本国中、すくなくとも牛乳パックを手にする人が、大切な資源だという意識を持てたら、と思う。メーカーも積極的にパックに表示するのもいいだろう。」「人工自然大国と呼ばれる日本。牛乳パック回収・改めて自然とモノの大切さを私たちに教えてくれようとしている。消費者パワーをいま一度、この運動に結集してみてもはどうだろうか。」と締めくくっています。

「自然とモノ」の大切さを学ぶ

再生紙に使われる牛乳紙パック
このように「牛乳パック回収、再生運動」は、自然とモノの大切さを私たちに教えてくれます。牛乳パックを回収して、再生紙に加工して、再び紙製品として使われます。これは、自然とモノの大切さを学ぶための重要な活動です。

一方、回収した牛乳パックの再生紙は、紙の重さから約半分程度しか使われません。残りの半分は、エネルギーを消費して処分されています。これは、自然とモノの大切さを学ぶための重要な活動です。

また、大阪府豊中市で八百屋を営む方が、牛乳パック回収運動に参加して、牛乳パックを回収して再生紙に加工して使っています。これは、自然とモノの大切さを学ぶための重要な活動です。

依頼した市内。さらに一家庭で一日に約一リットルずつ、月に約一リットル(牛乳パック約三十三個、ビン約三十五個)で、牛乳パックを回収して再生紙に加工して使っています。これは、自然とモノの大切さを学ぶための重要な活動です。

運動3年目のこの時点においても、乳業メーカーは知らぬ振り。当時の日本テトラパックの社長はある新聞の取材に「無意味な活動」と否定的なコメントをしていたことはいまだに忘れません。以降も日本テトラパックは、牛乳パックリサイクルは環境に負荷がかかることを立証しようと、(財)政策科学研究所に調査をさせ、LCAの有識者である大学教授を囲い込み、顧客を集めたクローズドのセミナーで牛乳パックをお湯で洗うと環境負荷が大きいなどの報告を行い、運動の火消しに躍起だったことを覚えています。

(10年後やっとヨーロッパにおいて1994年欧州包装廃棄物指令等の法整備により、紙パックを含む包装容器のリサイクル(但し洗浄しない混合回収)が進み、国内でも乳業・紙容器メーカーが牛乳パックリサイクル運動に理解を示すようになりました。)

単なる牛乳パックのリサイクルを進める運動ではないことが共感・賛同を得た

こうした牛乳パックの生産側の無関心さを全く意に介さなかったことは、先ほどのコラムにも紹介されています。『運動の先頭を切った自主グループたんぽぽの代表平井初美さんは「(牛乳パックの回収は)運動資金にもなりませんよ。しかし牛乳パックを通して子供にモノ、自然の大切さ、大げさに言えば地球との共存の大切さを食卓で語れます。運動も一面的にとらえるのではなくて、子育て、地域の連帯、人間の生き方を見つめる多面性が必要では」という。もどかしいが成果は大きいと語る口調ははずんでいた。』

牛乳パック再利用運動が、牛乳パックの生産側からは余計なこと、流通や古紙業界からは採算に合わないといふ理解されない中、なぜに各地の市民運動から共感・賛同されたのかといえば、牛乳パックを切り口に消費優先の生活スタイルを見直す、生き方を考えるという普遍的なテーマを据えたからだと思います。

この時代の消費者運動は、公害問題など企業責任を問う展開だったり、あるいは、古紙・アルミ缶の回収をして収益金を得る目的の活動だったりすると、目標達成で自然消滅することが多かったように思いますが、「人はどう生きるか」は人それぞれについて回る問題です。

牛乳パックリサイクルを社会や企業の問題としてではなく、自分自身に引き寄せて考えるという新しい視点の運動だったゆえ、共感・賛同を得られたのではないのでしょうか。(次号に続く)

林家カレー子さん主催 ひまわり環境寄席牛乳パック回収量報告

9月3日に開催された第3回ど根性ひまわり環境寄席ですが「牛乳パック5枚とトイレトペーパー1個を交換」とチラシに載せたところ350kg(枚数に換算すると約11700枚)の牛乳パックが集まり、中には1000枚もの牛乳パックを持参した方がいたそうです。

カレー子さんは、牛乳パックの回収率が低迷していることに対して何とか回収が進むように、日頃から行く先々で牛乳パックリサイクルを呼びかけてくださっています。

武蔵野市から東大和市に移住された現在、東大和市では牛乳パックの行政回収が行われてなく、店頭回収か数か所の公共施設・学校での拠点回収だけだそうです。そのため東大和市の住民にあまり牛乳パックリサイクルが浸透してないと感じたカレー子さんは、11月17日(日)に東大和市民会館ハミングホールにおいて環境寄席を開催し、再び牛乳パック5枚とトイレトペーパー交換を企画しています。すでに沢山の牛乳パックを集めてくださっている方がいらっしやると、お電話をいただきました。

回収にいつもご協力して下さる(株)山田洋治商店にも感謝していました。



紙パックとアルミ付き紙パックの混合回収を進めようとしている動きへの対応

まずこの動きについて未ざらし紙パックの生産が続く限り、パック連は現時点において反対いたします。また、アルミ付き紙パックの製造メーカーが、これまで紙パックリサイクルシステムを築き、支えてきた受け入れ製紙メーカー、古紙回収業界、団体等にしっかりと説明と理解を求める姿勢を見せない限り、容認しないための行動を起こしていきます。

古紙問屋の立場からも反対の声が

先月、ある古紙問屋さんより日経の会員向けサイトに、今年4月に日経ヴェリタスに掲載された記事（パック連通信 129号参照）と同様の内容記事が5月28日付、9月1日付けに載っているとご連絡いただきました。今回もまた日本テトラパックのアルミ付き紙パックのリサイクル推進のPRでしたが、未ざらし原紙を使用していることは全く書かれていませんでした。また、関西の一部の店頭では紙パックとアルミ付き紙パックの混合回収が行われていて、それら店舗に回収に行っている団体や福祉事業所が迷惑をこうむっていることにも全く触れられていません。ご連絡くださった方はこの記事の内容に非常に懸念を示され、パック連や同業古紙問屋、古紙再生促進センター関係の方に広く情報提供をされたそうです。

王子HD会長はテトラとの契約は産業古紙だけと断言

今年6月の古紙再生促進センターの評議会の席で私平井が、アルミ付き紙パックに未ざらしが混ざっており、紙パックの回収・再生現場を混乱させている状況を評議員の皆様へ訴えたところ、リモート出席されていた王子HDの加来会長が「テトラパックとの協業契約では産業古紙に限っていて、市中物は受けていない、勘違いされているのではないかと」と発言されました。私は重ねて現状はそうはなっていないことを伝えると、再度加来会長は産業古紙だけであると断言されました。「もし市中物を受けていたら王子さんはどうされるのですかね!？」という平井の発言を同席の皆様が聞いていらっしやいましたので、日経記事をご覧になって、どちらの発言が真実かわかりになったのではないかと思います。

全国製紙原料商工組合連合会と面談

先日10月7日に全国製紙原料商工組合連合会（全原連）を、容環協の伊藤常務、サポーターの山科さん、平井の3人で訪問し、大久保理事長と富所専務に情報提供の上、意見交換を行いました。

全原連としても分別は必須であるということ、昨今の人手不足で回収コストが安い混合回収を提唱するところもあるが、結果、再生の段階でメーカーが設備投資をしないと使えないことになり、全体のコストは膨らむ。排出する段階で分別を徹底してもらうことは今後も継続すべき。

とにかく、全原連としても今の牛乳パックリサイクルシステムを壊すようなことは容認しない、容環協、パック連を支持する、こうした情報は、日資連（日本再生資源事業協同組合連合会）、全都清（全国都市清掃会議）とも共有した方が良くと助言をいただきました。

容環協解散の言葉も出ていることに驚く

この面談の席で、容環協として把握しているアルミ付き紙パックについての時系列の動きが説明されましたが、日本テトラパック所属の方より「アルミ無しとアルミ付きの紙パック回収は一体化するべきで、容環協は解散する時期では」という発言まで飛び出しているようで、驚愕いたしました。

関西において既存の紙パック回収団体への影響を配慮せず、古紙回収業界の理解も得ないまま、力業でアルミ付き紙パック回収を進めているテトラパックの動きについて、この方の発言で腑に落ちました。

全原連の大久保理事長は、今の牛乳パックリサイクルは長い年月を経て築かれてきた。テトラパックがアルミ付き紙パックを進めたいのであれば、今の仕組みを壊さず独自の仕組みをしっかりと時間をかけてつくるべきと、創業100年を迎えた(株)大久保の「まこと」の信念と実績をもつ社長のお言葉でした。